

「か／も」の移動について

—帰謬法による議論—

外池滋生

1 はじめに

本稿の目的は日本語の WH 疑問文、WH 譲歩文において(1)(2)に示すように「か／も」が移動していることを「証明」することである。¹

- (1) a. [[君が何処へか行った_{TP}](の)_{CP}](知らない) ---> 「か」の移動
 b. [[君が何処へ 行った_{TP}](の) か]_{CP}](知らない)
- (2) a. [[君が何処へも行って_{TP}] C_{CP}]---> 「も」の移動
 b. [[君が何処へ 行って_{TP}] C も]_{CP}]

(1)(2)について、すでに外池(2015a)で、概略次のような分析を提案した。未定詞(indeterminate)「何処」は文脈により定義される場所の集合を指している。「か」は集合を引数(argument)として取り、その成員の一つを価として返す選言関数(Pick one)であり、「も」はその成員の全てを価として返す連言関数(Pick all/any)である。(1a)(2a)に示す位置から、節末の位置(=CP指定部)へ移動するのは、それにより、命題部分(=TP)が、未定詞がさす場所の成員数の命題からなる集合を表しているが、それを引数として取るためである。これがWH疑問文、WH譲歩文を成立させているメカニズムである。

そうであるならば、(3b)(4b)に見られる英語のWH疑問文とWH譲歩文でも同じメカニズムが成り立っているであろうということで、「か」に相当する英語の選言関数は音形がないので、これをKAと表し、「も」に相当する連言関数はeverであると提案した。

- (3) a. (I don't know) [_{CP} [_{TP} you went KA-where]] -->KAの移動
 b. (I don't know) [_{CP} KA-/Where/ [_{TP} you went {where}]]
- (4) a. [_{CP} [_{TP} you went wherever]] -->everの移動
 b. [_{CP} /wher/ever [_{TP} you went {where}]]

(3)において、KAが単独で移動せず、whereとともに移動することは、「移動は何らかの音

¹ 本稿は2015年12月19日に国立国語研究所での外池(2015f)の口頭発表に基づくものである。コメントを下された参加者諸氏に感謝いたします。

形を伴わなければならない」とする、Tonoike (2003, 2011)の顕在的統語論仮説(後出(7))からの自動的な帰結として扱う事ができる。KA 単独では音形がないので、where の音を伴って移動しているのである。/where/は where の音形で、where の意味そのものは{where}で表すように元位置にとどまっている。ever の移動が where を伴っているのは、ever が接辞として where と一語になっているからである。(この場合も移動しているのは where の音形 (/where/であって、意味は元位置に{where}として残っている。

これが正しければ、日本語と英語との間に WH 疑問文と WH 譲歩文を成立させているメカニズムに関する差はなく、違いは「か」「も」が単独で移動するか、KA, ever が未定詞(=WH要素)を伴って移動するかどうかであり、その意味で、英語における WH 移動に対応しているものは日本語における「か」「も」の文末への移動であることになる。

このような主張を外池(2015e)の発表で行ったが、その際に「か」「も」が選言関数、連言関数であるということはいいとしても、別に(1a)(2a)のように TP 内に置いておいて、それを(1b)(2b)のように移動しなくても、最初から(1b)(2b)の CP の何処かに基底生成すればいいのではないかという意見が出された。²

この意見に答えて、本稿では、(1)(2)ではやはり「か」「も」が移動していることを、すなわち、日本語にも WH 移動が存在するというを示す帰謬法的議論を提示する。

2 帰謬法による「証明」

まず、当然のことであるが、言語学は経験科学であるから、厳密な意味での「証明」はあり得ない。しかし、理論的な枠組みを固定して、推論を重ねると幾何学における帰謬法のような理屈で移動がなければならないということを示すことができる。

まず「証明」したいことは(5a)であり、これを p と置く。(5b)を既知の事実であると想定し、これを q と置く。

- (5) a. 証明したい事: 「か/も」は移動している (=p)
 b. 既知の事実: 英語の従属節では where/wherever が移動している (=q)
 i. (I don't know) where you went * (I don't know) you went where
 ii Wherever you went, *you went wherever

次に理論的枠組みとして(6)(7)(8)が正しいものと想定する。

- (6) 画一性の原理(普遍性仮説)(Chomsky 2001:2)

In the absence of compelling evidence to the contrary, assume languages to be

² 田窪行則氏の発言であったと記憶しているが、他にも同様の発言があったかもしれない。

uniform, with variety restricted to easily detectable properties of utterances.

(7) 顕在的統語論仮説 (Overt Syntax Hypothesis)

移動 (内部併合) は音を伴わなければならない

(8) 疑問節／譲歩節では選言関数／連言関数 V/\wedge は CP (指定部) にななければならない。

(6)は、一つの言語において成り立っていることは、そうではないとする強い理由がなければ、他の言語でも成り立っていると仮定しようということである。(7)は Tonoike (2003) 以来提案している普遍文法の原理である。(8)は英語でも日本語でも成り立っているものという仮定である。

その上で「証明」したい p が真でない、つまり (9) を仮定しよう。そうすると (8) が成立するためには、(10) でなければならない。

(9) 「か／も」は移動しない ($=\sim p$) とする

(10) 「か／も」は CP に基底生成される

(6)から、英語でも「か」「も」に相当するものは CP (指定部に) 基底生成できると考えなければならない。今「か」「も」に相当するものを V と \wedge として表すと、(11)のような姿になる。

(11) a. [V C [you went where]]

b. [\wedge C [you went where]] ([-ever C [you went where]])

このことから、次の例がともに文法的であることが帰結する。

(12) a. *(I don't know) you went where

b. *-ever you went where (形態論により排除可能)

(12b)が非文法的であることは、ever が形態論上接辞であるのに、where と一語をなしていないということから説明可能である。しかし、(12a)は(12b)の既知の事実と反する間違った結論である (Reductio ad absurdum)。この間の推論に誤りがなければ(13)に示す通り、p でないとする仮定から、q でないとする誤った結論が導かれたが、その原因は p でないとする出発点の仮定であった。

(13) $\sim p \rightarrow \sim q$

従って、帰謬法的論理からすると(14)が結論として導かれる。

(14) $\therefore p$ である。

3 顕在的統語論仮説

帰謬法的論理による結論は顕在的統語論仮説(7)を前提としている。この仮説が間違っているという反論が当然あり得るから、非顕在的移動(LF移動)が必要であるとされる現象が顕在的統語論仮説に沿う形で処理できるということを簡単に述べておく。

3.1 演算子-変項構造

そのような事実の一つは、(15)の例は全て演算子-変項構造を含んでおり、(15a)ではそれがWH移動により顕在的に形成され、(15c-d)では数量詞繰り上げ(Quantifier Raising; QR)によって非顕在的に形成されるというものである(May 1977, 1985)。

- (15) a. (I don't know) which book John read
 b. John read some book (in the library)
 c. John read every book (in the library)

しかし、外池(2015a) Tonoike (2015c)で提案しているWH疑問文の分析が正しければ、(15a)におけるWH移動は演算子-変項構造を形成するためのものではなく、(16)に示すように選言関数VをCP指定部に移動して、命題の集合であるTPをその引数とするためのものである。

- (16) a. $[_{CP} C [_{TP} \text{John read } V\text{-which-the book}]]$
 b. $[_{CP} V\text{-/which book/} [_{TP} \text{John read } \{\text{which-the book}\}]]$
 c. 音: which book John read
 d. 意味: V [John read which-the book]
 e. which=演算子、the=変項、book=制限子

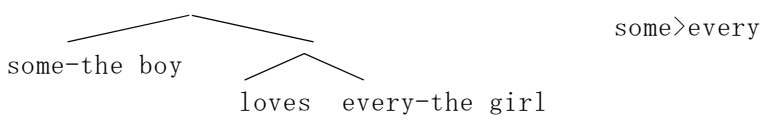
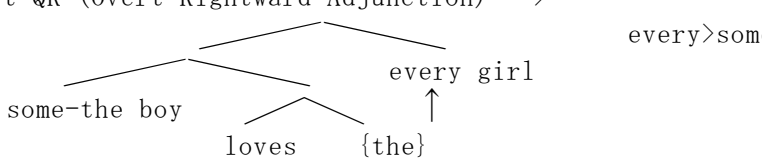
音形をもたないVを移動するために、which bookの音/which book/が移動しているが、その後にはwhich bookの意味{which-the book}がそっくり残っており、それは、全ての演算子を含んだ表現には(通常発音されない)定決定詞theが含まれており、これが変項として機能するというTonoike (2003, 2011)の提案に従えば、演算子-変項構造はwhichとtheとの間で成り立っているのである。

(16b-c)は、この分析では、いずれも音形のないtheを含む(17)に示す構造をしており、演算子-変項構造は、元位置で成り立っており、非顕在的な移動が関与する余地がない。

- (17) a. John read some-the book every=演算子
 b. John read every-the book some=演算子

3.2 数量詞作用域の多義性

QR は (18a) のように複数の数量詞を含む表現における数量詞作用域の多義性を捉えるのに必要であるとされる。しかし、定決定詞が変項として働くという Tonoike (2003, 2011) の提案では (18a) (の v*P) は概略 (18b) のような構造をしていて、演算子-変項構造は some / every と the の間に成り立っていて、some > every という数量詞作用域関係は、some と every の C 統御関係で捉えられている。他方 every > some の解釈は、(18b) で every girl を (v*P 全体に) 右方付加する操作 (Overt QR) により、(18c) の構造により捉えられる。この時変項として働く定決定詞は元位置に残り、それと繰り上げられた every との間で演算子-変項構造が成立している。

- (18) a. Some boy loves every girl
- b.  some-the boy loves every-the girl some > every
- Overt QR (Overt Rightward Adjunction) --->
- c.  some-the boy loves every girl every > some
 ↑
 {the}

Overt QR は語順に影響を与えていないので、(18a) は二つの LF 構造を持ち、そのために多義性が生じる。これにより (18a) に見られる数量詞の多義性は非顕在的移動である QR を用いなくても捉えることができることが分る。

3.3 元位置 WH 疑問文

逆に (19) のような元位置 WH 疑問文で何故 WH 移動が起きないのかが問題になるが、これは (19b-c) の対比で分るように、いわゆる主節現象で、主節では選言関数は元位置において、それを含む TP をその作用域に取ることができるとして、説明できる。

- (19) a. You went where?
 b. *I don't know you went where.
 c. I don't know where you went.

同様のことが日本語でも言える。主節である(20a)では、「か」の出現が義務的ではないが、(20b-c)の対比で分るように、従属節では「か」の出現が義務的である。

- (20) a. 何処へ行ったの
 b. *何処へ行ったの知らない
 c. 何処へ行ったのか知らない

もっとも簡単な説明は、(21)に示すように、主節においてのみ選言関数の基底生成が可能であると想定することである。

- (21) a. [V [You went where]]
 b. [[何処へ行った]のV]

3.4 多重 WH 疑問文

多重 WH 疑問文の扱いにも非頭在的 WH 移動が必要であるとされる。しかし、外池(2015b)の提案に従って、演算子を含む表現には全て、(通常発音されない) 定決定詞が含まれていて、それが変項として働くという分析のもとでは、複数の WH 句について、一つの疑問が成り立っているという事実は次のように捉えることができる。(22a)のような多重 WH 疑問文は、(22b)のような構造から出発すると仮定しよう。V-{which-the boy, which-the girl} は、一つの選言関数Vが二つの WH 句からなる多層 WH 句を共有していることを表している。(22b)では、この多層 WH 句がまず、動詞 love の補部として併合された構造である。今 which-the girl に love から目的語としての θ 役割が与えられたとして、which-the boy はまだ θ 役割がない。そこで、側方移動(Sideward Movement)により、このV-which-the boy を取り外して、主語の位置に併合することができると仮定しよう。その結果が(22c)である。

- (22) a. (I wonder) which boy loves which girl
 b. loves V-{which-the boy, which-the girl}
 c. V-which-the boy loves which-the girl

これにより、一つのVが二つの WH 句と連合していて、pairwise な答えができることが捉えられている。この場合でも、(WH) 演算子-変項構造は、主語の位置と目的語の位置で、which と the の間に成り立っており、非頭在的 WH 移動は分析にとって不要である。

4 Szabolcsi (2015)

「か／も」について、Szabolcsi (2015)が、束理論 (lattice theory)を使って、「か」は結び演算子 (join operator)で、「も」は交わり演算子 (meet operator)に関連づける、興味ある提案をしている。

(23) KA is lattice-theoretic join (\cup). MO is lattice-theoretic meet (\cap). (p.3)
(join=結び、meet=交わり)

束理論を用いることと、選言／連言関数を用いることは恐らくは同じ結果を生むのではないと思われるが³、一点だけ Szabolcsi の提案の問題点をあげておきたい。それは、Szabolcsi が mismatch problem と呼ぶ問題と関係している。(24)に示すように、例えば日本語の「も」に相当する MO も、ハンガリア語の is も非接続項の数だけ出てきているが、結び演算子 (meet operator)としては一つしかないと考えられる。つまり、一つの結び演算子に対して、複数の MO が現れていることを Szabolcsi は問題にして、そのために、(24)に引用するように「か／も」を結び／交わり演算子そのものではなく、そのようなものが存在することを示して (point to) いるものであるという扱いをしている。

(24) Schematically Hungarian
John MO Mary MO danced. János is Mari is táncolt.
“John danced and Mary dance” “John danced and Mary danced”

(25)=(her 13) MO and KA “point to” meets and joins, but are not meet and join operators. MO and KA occur in “meety” and “joiny” contexts, but they do not embody meet and join operators themselves. Instead, MO and KA impose semantic requirements whereby they force their contexts to be interpreted as the meet (greatest lower bound) and the join (least upper bound) of the contribution of their hosts and something else.

つまり、(26)のようなことを主張しているのである。

(26) 抽象的なKA/MOが一つあって、それと呼応して(複数の)「か」／「も」がある。

³「か／も」を言語(学)的に捉えると選言／連言関数で、それを数学的に捉えると結び／交わり演算子であるということかも知れない。

しかし、このような抽象的な扱いをする必要はない。(27a) (28a)のように選言関数／連言関数が臨時的に形成された集合を引数としてとるときは、関数としては一つであるが、(27b) (28b)のようにその音形が集合の成員に分配されるとする形態論による扱いを採用すればよいのである。

- (27) a. JohnかMaryか
 b. John/か/ Maryか /か/=「か」の音 か=「か」の音と意味
 c. 論理形式 {John, Mary}か
 d. 音声形式 /JohnかMaryか/
 (28) a. JohnもMaryも
 b. John/も/ Maryも /も/=「も」の音 も=「も」の音と意味
 c. 論理形式 {John, Mary}も
 d. 音声形式 /JohnもMaryも/

5 まとめ

本稿では、選言関数と連言関数に関して、(29)に示すように言語横断的に大規模異形態関係(Radical Allomorphy)が存在すると主張していることになる。

- (29) a. V: か some or V
 b. \wedge : も every and -ever

そして一つの選言関数／連言関数に対して複数の「か／も」が表れるのは、(29)に示すような統語構造を線形化(linearize)する際の形態論的重複／分配(morphological reduplication/distribution)の結果であると捉えられる。

- (30) a. $X - \{A, B, C\} \rightarrow X-A, X-B, X-C$
 b. $\{A, B, C\} - X \rightarrow A-X, B-X, C-X$

そして、帰謬法的議論により(31)を主張した。

- (31) a. 「か／も」は選言／連言関数(Pick one/Pick all)である。
 b. WH疑問文、WH譲歩文では、選言／連言関数が移動する。
 c. 日本語のWH疑問文、WH譲歩文でも「か／も」が移動する。

6 Appendix 1 「も」か「と」か

研究発表の折に富岡諭氏より、日本語では and に対応するのは「も」ではなく、「と」ではないかという指摘をいただき⁴、それに対して、接続詞としての「と」の用法は限られていて、「も」の方が「か」と対応しているということを述べたが、具体的な事実については、触れなかった。以下のような事実が念頭にあったのである。

- | | | | | |
|------|----|------------|-------------|------------|
| (32) | a. | 太郎も花子も | 太郎と花子と | 太郎か花子か |
| | b. | 京都からも奈良からも | *京都からと奈良からと | 京都からか奈良からか |
| | c. | 煮ても焼いても | *煮てと焼いてと | 煮てか焼いてか |
| | d. | 大きいも小さいも | *大きいと小さいと | 大きいか小さいか |
| | e. | うっかりもぼんやりも | *うっかりとぼんやりと | うっかりかぼんやりか |

「と」はほぼ名詞に限られるが、「も」は英語の and のように幅広い範疇を接続できる。「か」も同様である。

7 Appendix 2: 先行詞内削除 (Antecedent-Contained Deletion)

同じく研究発表の折に、西垣内泰輔氏から先行詞内削除の例は QR のような非顕在的移動なしでは処理できないのではないかという指摘があり、そのようなことはないがその説明には時間がかかるとだけ述べた。実は、先行詞内削除の例は QR では説明できず、Overt QR でなければ説明できないのである。何故時間がかかるかというと、先行詞内削除には、関係節の分析と、削除の分析と数量詞の分析の3つの分析が絡んでいるからである。

まず、(33a)を例にとり、これが QR を使ってどのように説明されるかを見てみよう。

- | | | |
|------|----|---|
| (33) | a. | Mary will read every book that John does |
| | b. | Mary will [_{VP} read every book that John does [_{VP}]] |

7.1 標準的分析

西垣内氏の念頭にあったのは May (1985), Fox (2002)などの「標準的な」説明であろう。「標準的な」説明は次のことを想定している。

⁴ 同様のコメントを豊嶋孝之氏 (p. c.)からもいただいた。氏は「も」は also や even が本意で、「と」が本来の等位接続詞であるという意見であった。私は「も」が also や even として解釈されるのは文脈によるもので、「山田も来た」というのは、「来た」が成り立つ個体の集合 S に山田という個体を合わせた集合 {S, 山田} が「も」の引数となっているので、「文脈で特定できる S も来たし、山田も来た」ということを表すので、also の意味が出てくるし、S と比較して「来ること」について、山田が「意外である」という文脈では even の意味も出てくると考える。

- (34) a. 削除は LF における意味のコピーにより扱われる
 b. 数量詞は LF において QR を受ける
 c. QR を含め移動は痕跡 t を残す

まず、単に(34a)だけでは(33a)は扱えないことは明らかである。(33b)の大きい VP をコピーして、削除された VP の位置にこれを入れても、 $[_{VP} \text{ read every book that John does } [_{VP} \text{ read every book that John does } [_{VP} \quad]]]$ ができるだけで、削除された部分の意味は回復されない(これが regress problem と呼ばれるものである)。しかし、every book 以下は数量詞を含んでいるので、(34b)から、これに QR を適用することができる(適用しなければならぬ)。その結果(35a)が得られ、そうすると $[\text{read } t]$ という VP ができるので、これを削除された $[_{VP} \quad]$ にコピーすれば、(35b)が得られ、先行詞内削除が抱えていた regress problem が解消する。

- (35) a. every book that John does $[_{VP} \quad]$ [Mary will $[_{VP} \text{ read } t]$]
 b. every book that John does $[_{VP} \text{ read } t]$ [Mary will $[_{VP} \text{ read } t]$]

7.2 標準的分析の問題点

確かに巧妙な解決方法であるように見えるが、これには二つの大きな問題がある。

7.2.1 痕跡の問題

一つは痕跡 t の使用である。May(1985)の当時、痕跡は t としてその内部を問題にできないものと想定されていた。しかし、現在は移動のコピー理論により、痕跡は t という単純な形では存在しない。移動のコピー理論からすれば、QR の結果は(35a)ではなく(36a)であり、後に残った「痕跡」を含む VP にはまだ削除された VP である $[_{VP} \quad]$ が残されている。

- (36) every book that John does $[_{VP} \quad]$ [Mary will $[_{VP} \text{ read every book that John does } [_{VP} \quad]]]$

QR により、説明すべき削除部分が増えて行くばかりで、何時までたっても t のような便利なものは出てこないのである。⁵

⁵ このようなこともあってか Chomsky(2013)は Fox の説明は impressive であるが、正しい筈がないとして、代わりに音声的に弱化して消えてしまったのであるとする以前からの提案をいまも維持している。たしかに、Fox(2002)の扱いは移動のコピー理論を用いたもので、その意味で t という痕跡は用いないが、変項と定決定詞を導入するという痕跡転換(Trace Conversion)と呼ぶ操作を必要とし、派生の過程でいかなる要素も新たに導入する事はできないという包含性条件(Inclusiveness Condition)に抵触しているためそのままでは維持できない。ただし、Chomsky の分析も (36a)の例は説明できない。詳しくは後述。

7.2.2 数量詞作用域の問題

そればかりではない、(37a)のような例は、仮に QR により痕跡 t が作られるとしてもうまく記述ができないのである。

- (37) a. Some student will read every book that John does [_{VP}] every>some
 b. Some student will read every book some>every every>some

(37a)において決定的に重要なことは、そこに含まれる二つの数量詞 some student と every book が、(37b)においては示す作用域の多義性を示さず、some>every の解釈しか許さないことである。この事実は、some student, every book の両方に QR が適用しなければならないとする標準的な分析では到底捉えられない。

7.3 顕在的 QR、省略 (= 削除) の移動分析、関係節の DP 移動分析

これらの問題は顕在的 QR、削除の移動分析、関係節の DP 分析を採用すれば解決する。

7.3.1 顕在的 QR

顕在的 QR とは、英語における数量詞作用域の多義性は文末の数量詞を右方付加することにより、それより左の上位にあった別の数量詞を C 統御する位置に移動させることができるとする上で見た分析である。Heavy DP Shift のような場合を除いて右方付加は語順を変えないと想定する。

7.3.2 省略 (= 削除) の移動分析

一般的に省略の現象をどのように扱うかという問題がある。現在広く使われているのは、LF におけるコピーと PF における削除である。この二つにはどちらもそれなりにうまく事実を処理できることは(38)の動詞句削除の例で示す通りである。

- (38) a. I can do it if you can [_{VP}]
 b. I can do it if you can [_{VP} ~~do it~~]

(38a)では、中身のない VP に do it をコピーしてくれば正しい LF 表示が得られる。(38b)では、PF で VP の音が消されているが、LF では意味が残っているからこれも正しい LF 表示を出す。

問題は、このどちらを使ってもよいという点である。LF コピーと PF 削除の両方があり、どちらを使っても良いということは理論上極めて好ましくない状況である。両者に真の概

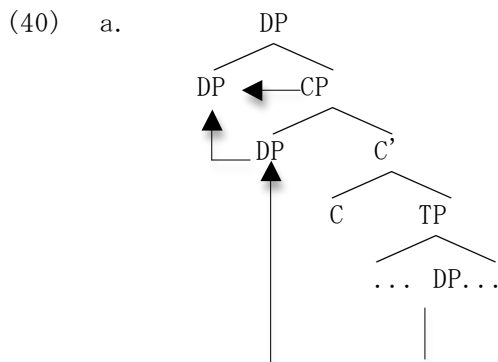
概念的必然性 (conceptual necessity) があるかどうかは定かではない。他方現在の理論で概念的必然性を疑うことができない操作は併合 (Merge) であり、それは移動 (Move) も含む。そこで、省略について、もっとも望ましい処理は、これを全て移動により処理することである。(38) の例にあてはめると次のような分析が可能になる (動詞句内主語仮説を想定する)。まず (39a) には二つの統語物 (syntactic objects)、L と M がある。

- (39) a. L: v* M: [_{VP} you v* [_{VP} do it]]
 VP の側方移動による併合 (意味のコピー {do it} を残す --->
 b. L: [v* [_{VP} do it]] M: [you v* [_{VP} {do it}]]

v* は動詞句の補部を必要としているので、M から動詞句 [_{VP} do it] を移動し、v* に併合すると (39b) が得られる。この時標準的な移動のコピー理論ではなく、移動の部分コピー理論 (Partial Copy Theory of Movement) を想定する。これは、全てがコピーとして移動されるのではなく、意味のコピーだけが残るとするものである。これにより、PF 削除も、LF コピーも不要になる。後は、それぞれに、you, can, if などを併合し、最後に L に M を付加すれば (38) が得られる。

7.3.3 関係詞化

Tonoike (2008) で、関係節は下に英語の語順で図式的に示す 3 つの操作により形成されるという関係詞化の DP 移動分析を提案した。



- b. [_{CP} C [_{VT} John read every-the book]]
 Predicate Formation (またの名を WH 移動) --->
 c. [_{CP} every-the book C [_{VT} John read {the}]]
 DP Extraction and CP Adjunction --->
 d. [_{DP} [_{DP} every-the book] [_{CP} /the/ C [_{TP} John read {the}]]

(40b)では、TP内のDPが関係詞化のターゲットとしてCにより選ばれて、CP指定部に移動する。その折にDPが含んでいた定決定詞theの意味のコピー{the}が残される。これが(40c)の段階である。そのDPが(別の主要部との併合のため側方移動により)取り出される(DP Extraction)と、即座に関係節のCPがそのDPに付加(CP Adjunction)する。これにより、(40d)が得られる。CP指定部にはtheの音/the/が取り残されるが、これはCに音形がない場合は関係代名詞whichとして書き出し(Spell-Out)を受ける。この分析で重要なことは、(40d)において、先行詞every-the bookの中にあるtheとreadの目的語の位置にある{the}とは同じ定決定詞のコピーであるということで、これにより、二つのDPが同一指示であるという関係節において最も重要な事実が捉えられるのである。

7.4 先行詞内削除

さて、以上を前提に先行詞内削除の(41) (=37a)の例がどのように扱われるか見てみよう。

6

- (41) a. Some student will read every book that John does
 b. L: v*
 M: [CP that [TP /John/ does [v*P {John} v* [VP read every-the book]]]
 VPの側方移動(意味を残す) --->
 c. L: [v* read every-the book]]
 M: [CP that [TP /John/ does [v*P {John} v* [VP {read every-the book}]]]]
 some-the studentの併合--->
 d. L: [v*P some-the student v* [VP read every-the book]]
 M: [CP that [TP /John/ does [v*P {John} v* [VP {read every-the book}]]]]

(41a)の派生は(41b)のLとMの二つの統語物から始まる。Mは関係節であるから、Cのthatは関係詞化されるevery-the bookを見つけて、最終的にはこのDPに付加するという使命を帯びていると仮定する。普通であれば、このDPをCがその指定部に取り出すのであるが、その操作(WH移動)が適用するまえに、補部のVPを必要としているLのv*に補部を提供するために側方移動が適用し、(41c)が得られる。これが通常の関係節の派生におけるPredicate FormationとDP Extractionの働きを代行したことになるかと仮定する。Lに主語のsome-the studentが併合されると(41d)が得られる。ここでMのthatはLに含まれるevery-the bookに付加するという使命を持っているから、それが達成できれば、(41a)が

6 以下の内容は外池(2015d)参照。

首尾よく派生されることになる。

しかし、問題がある。(41d)において、MのCPがLのevery-the bookに付加することは(42)のような趣旨のChomsky (1995)の拡大条件(Extension Condition)に違反する。

(42) 拡大条件 (Extension Condition)

統語操作は適用する統語物を拡大しなければならない。

(41d)のLにおいてevery-the bookというDPは既にv*Pの中に含まれているから、DPにCPを付加しても、v*Pという適用対象物を拡大したことになる。

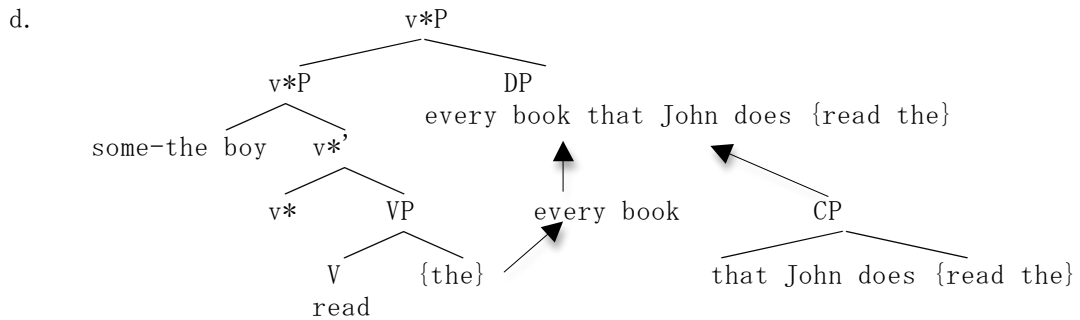
しかし、Tonoike (2003, 2011)の顕在的QRが正しければ、every-the bookは数量詞表現であるから、顕在的QRの適用対象である。この操作は、次に示すように、数量詞表現を定決定詞を残して、取り出し、その後に取り出した物を、元の構造に付加するという二段階の操作として捉えることができる。

- (43) a. some-the student read every-the book
every bookの取り出し-->
- b. [some-the student read the]
[every-book]
every bookの付加-->
- c. [[some-the student read {the}] [every book]]

顕在的QRは(41d)のLのevery-the studentに適用すると、一瞬(44a)の3つの統語物が存在することになる。この段階で、CPは拡大条件に違反することなくDP、every studentに付加できる。その結果、(44b)の構造が得られる。DPの取り出しはもともとOvert QRの操作であったから、関係節を背負い込んだDPは大きなお荷物にも気付かず、当初の目的通りv*Pに右方付加すると、(44c)が得られ、その構造を図にすると(44d)のごとくである。

- (44) a. L: [_{v*P} some-the student v* [_{VP} read {the}]]
N: [_{DP} every book]
M: [_{CP} that [_{TP} /John/ does [_{v*P} {John} v* [_{VP} {read every-the book}]]]]
CP付加-->
- b. L: [_{v*P} some-the student v* [_{VP} read {the}]]
N: [_{DP} [_{DP} every book] [_{CP} that [_{TP} /John/ does [_{v*P} {John} v* [_{VP} {read every-the book}]]]]]]
顕在的QRによる付加--->

c. L: [[_{v*P} some-the student v* [_{VP} read {the}]] [_{DP} [_{DP} every book] [_{CP} that
[_{TP} /John/ does [_{v*P} {John} v* [_{VP} {read every-the book}]]]]]]]



顕在的 QR、関係節の DP 移動分析、「省略」現象の移動分析、そして、元位置演算子-変項構造分析等を想定する枠組みでは、これが(41a) Some student will read every book that John does の唯一の派生方法であるが、そこにおいて必ず顕在的 QR の適用がなければ関係節の付加が生じ得ないという事情から、every>some の解釈があり、逆の some>every の解釈がないということが捉えられる。May らの QR を用いた分析では、(41a)が多義的でなければならないという間違っただ予測を生んでしまう。⁷

7.5 結論

ということで、先行詞内削除の現象は、非顕在的移動である QR を用いなければ説明が難しいのではなく、QR を用いた説明では記述的妥当性すら満たせなく、Overt QR を用いた上述の分析であれば正しく記述できるのである。

参考文献

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, MA.
 Chomsky, Noam (2001) “Derivation by phase.” In *Ken Hale: A Life in Language*, ed. M. Kenstowicz, 1-52. MIT Press, Cambridge, MA.
 Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection.” *Lingua* 130: 33-49
 Fox, Danny (2002) “Antecedent Contained Deletion and the Copy Theory of Movement.” *Linguistic Inquiry*. 33, 1: 63-96.
 May, Robert (1977) *The Grammar of Quantification*. Doctoral Dissertation, MIT.
 May, Robert (1985) *Logical Form: Its Structure and Derivation*. The MIT Press, Cambridge, MA.
 Szabolcsi, Anna (2015) “What Do Quantifier Particles Do?” *Linguistics and*

⁷ Chomsky の音声的弱化の分析では、(36a)の例が数量詞作用域の多義性を示さないことを全く捉えられないばかりか、Read every book that John does, some student will のような例の扱いに困ることになると予想される。

Philosophy 38:159-204. Springer.

Tonoike, Shigeo (2003) “Overt QR: A Case Study from English.” 英文学思潮 76, 73-96.
青山学院大学。

Tonoike, Shigeo (2008) “A General Theory of Relativization.” MS, University of
Hawaii.

Tonoike, Shigeo (2011) “The Inclusiveness Condition and Operator Variable
Constructions: Definite Determiner as a Variable.” 英文学思潮 84, 9-28.
青山学院大学。

外池滋生 (2015a) 「日本語の疑問文と「か」と「も」『日本語疑問文の通時的・対照言語
学的研究研究報告書(2)』, 77-99。

外池滋生 (2015b) 「日英語における多重 WH 構文の扱いと島の制約」『日本語疑問文の通
時的・対照言語学的研究 研究報告書(2)』, 61-75。

Tonoike, Shigeo (2015c) “A General Theory of WH-Questions.” A talk given at Tuesday
Seminar, Department of Linguistics, University of Hawaii at Manoa.

外池滋生 (2015d) 「私の研究遍歴」江頭浩樹他(編)『より良き代案を絶えずもとめて』
pp. 507-533. 開拓社、東京。

外池滋生 (2015e) 「WH 疑問文の理論と Clausal Typing Hypothesis 理論の問題点」「日
本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」(リーダー金水敏)研究会. 大阪大学豊
中キャンパス.

外池滋生 (2015f) 「「か／も」の移動について--帰謬法による議論」「日本語疑問文の通時
的・対照言語学的研究」(リーダー金水敏)研究会. 国立国語研究所。